

大学経営政策研究

第15号 (2025年3月発行) : 211-227

## 英国大学におけるREFインパクト評価への 組織的取組

2024年度大学経営政策演習受講者一同



# 英国大学におけるREFインパクト評価への組織的取組

2024年度大学経営政策演習\*受講者一同\*\*

## 1 はじめに

### 1.1 本稿の背景

近年、科学研究の評価指標として社会的インパクトが重要視されるようになってきた。特に1990年代以降、知識基盤社会を前提とした科学的研究の質の考え方が変容し、研究の質は研究者個人から組織・ネットワークへ、純粋に科学的な基準から社会的な基準を含むものへと移行してきた(Hemlin & Rasmussen 2006)。歴史的に、研究評価は科学的知識の妥当性を評価するために研究者個人やプロジェクトを対象として行われてきたが、研究活動の多様化とともに研究機関や組織のマネジメントの重要性が増し、多様な指標の必要性や研究成果の社会・経済・文化面のインパクト、基盤的データの活用、大学等の研究戦略との連結が課題として挙げられるようになってきた(林2017)。こうした中、研究インパクト評価<sup>1</sup>は機関・組織レベルでどのように受容され、またいかなる取組や仕組によって実質化されているのだろうか。

本稿ではこうしたインパクトに関する世界的な関心の高まりを踏まえて、研究インパクト評価を制度化して10年以上の実績を有する英国のResearch Excellence Framework (REF) の実践に着目する。REFでは、初回のREF2014後に発表されたStern Reviewにおいて研究者個人と業績の繋がりを断ち切ることが提案され(Stern 2016)、REF2021以降は機関に所属する全研究者が成果提出の対象となった。しかしながら、インパクトの評価と創出に対する機関の支援の現状を評価する研究は十分に行われていない。また、後述のとおり先行研究には様々な傾向が見られるものの、複数大学の比較を通じたREFのインパクト評価に対する大学等の機関・組織レベルでの組織的な取組や支援体制を明らかにした研究も、その重要性にもかかわらず管見の限り十分に行われていない。本稿はこうした背景に基づき、研究評価の新たな展開を考える上での知見を探るものである。

### 1.2 社会的インパクトをめぐる動向

研究の社会的インパクトをめぐるグローバルな趨勢は、英国や日本ではいかに受容されているのだろうか。本稿が着目する英国のREFに焦点を当てて検討する。

英国では、2014年から高等教育機関における研究評価の枠組であるREFにおいてインパクト評価が導入され、非学術的インパクトの体系的な評価が初めて開始された(Keith et al. 2018)。REFは1986年に導入されたResearch Assessment Exercise (RAE)を前身とし、2000年代の政治的・経済的議論でのRAE改革提言を契機に、イングランド高等教育財政審議会(HEFCE:

\*東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策コースで2024年度に開講された授業科目(担当:両角亜希子)

\*\*小椋裕子, 今野翔太, 鈴木拓人, 高見英樹, 高本尽, 中村祥子, 長谷坂大樹, 福田由紀子, 松村彩子, 水野雄介, 吉岡香奈, 吉田翔太郎(氏名は五十音順)による共著

Higher Education Funding Council for England : 現UK Research and Innovationに属する Research England) が、財務省が提案する定量的指標への全面移行を避けつつ研究の社会的価値を示す試みとして、インパクト評価を導入したものである<sup>2</sup>。REFは、年間約20億ポンドの公的研究資金<sup>3</sup>の二元的支援体制 (dual support system) の下での基盤的資金の配分に重要な役割を担っている (秦 2018)。評価は、主に研究成果 (outputs)、研究のインパクト (impact)、そして研究環境 (environment) の3つの要素について行われ、REF2021では高等教育機関が提出した各要素に関する詳細な情報に対し、34分野の専門家パネルによるピアレビューが実施される (スウィーニー・池田 2019)。

インパクト評価では、各機関が提出する Impact Case Studiesに基づき、研究が学術界を超えて経済・社会・公共政策などに与えたインパクトが評価され<sup>4</sup>、社会への影響度 (reach) と重要性 (significance) の2基準によって判断される<sup>5</sup>。インパクトの重み付けは、全体の20% (REF2014) から25% (REF2021) へと引き上げられ、重要性が高まっている<sup>6</sup>。また、REFの結果は、大学ランキングや評判にも大きな影響を与え、さらにインパクト評価が大学の重視する価値として組織文化の中に組み込まれつつもあり (林 2022)、英国の高等教育機関にとって極めて重要な評価システムとなっている。

翻って日本では、こうした英国のREFを参考にして、近年の高等教育政策において社会的インパクトの重要性が認識されつつある。国立大学法人評価では、その試行段階から「社会・経済・文化的貢献」の視点が含まれていたものの、実質的な活用には至っていなかった (林 2020)。その後、社会的インパクトの概念が徐々に浸透し、2016年の第5期科学技術基本計画などにおいて社会的インパクト評価が推進されはじめ、2022年からの第4期中期目標期間における国立大学法人運営費交付金の評価において、社会的インパクト評価が具体化されつつある<sup>7</sup>。

このように、世界的な社会的インパクトの重要性の高まりを受け、日英どちらの国においても政策・補助金的誘導により、大学等の機関・組織レベルでのインパクトの創出を根付かせようと動いている。しかしながら、日本の大学では研究インパクト評価を高めるための取組に関する知見が十分に蓄積・共有されておらず、各大学において手探りの中で取組が進められている状況にあるのではない。そうした中で、日本における社会的インパクトと機関・組織レベルでの取組を検討するには、英国におけるREFへの取組の検討は大きな意味をもつと考えられる。

## 2 先行研究と研究枠組

### 2.1 先行研究の検討

上述の研究背景に基づき、REFに関する研究を中心にして先行研究を整理する。英国REFのインパクト評価に関する先行研究は、マクロな制度的意義、定義・評価体制、研究評価への活用、評価結果の分析、具体的事例の検討、研究者の認識など多岐にわたる。King's College London and Digital Science (2015) は、社会的インパクトの事例分析から、対象研究の学際性や広範な便益、小規模機関の専門分野での優位性を指摘し、評価指標の標準化には継続的改善が必要と結論づけた。また、インパクト評価導入への評価は分かれており、Watermeyer (2016) は外部圧力に

よる評価指標化を批判する一方、Khazragui & Hudson (2015) は大学の内部資源活用の必要性から肯定的に捉えている。ただし、実施面での負担軽減は課題とされる (Murphy 2017)。

横断的な分析として、小林ほか (2015) は主要10大学の分析から、優れた研究成果を持つユニットはインパクトでも高評価を得る傾向を、特に生物科学系・臨床医学系で確認したほか、小林ほか (2022a) は、REF2021ではREF2014より全評価指標が上昇したことを指摘した。分野別では、藤井 (2016) が歴史分野で国際発信と定量的証拠の重要性を指摘し、小林ほか (2022b) は評価向上の要因として学習効果等を挙げている。

研究者の認識に関する研究では、Samuel & Derrick (2015) がREF評価パネリストのインパクトを成果とする傾向を、Smith et al. (2020) は公衆衛生分野研究者の認識を3分類で分析し、Watermeyer & Tomlinson (2022) は研究者のアイデンティティへの影響を指摘している。

以上のように、先行研究ではマクロな制度的意義から個別分野の事例、研究者個人の認識まで、多様な観点からの検討が行われているが、Keith et al. (2018) も指摘するように、ヨーロッパ全体におけるインパクトの評価と創出に対する機関レベルでの支援体制に焦点を当てた研究は十分に行われていない。本稿は、この研究上の空隙を埋めることを試みるものである。

## 2.2 研究枠組および方法

先行研究を踏まえ、本稿では個別大学の事例に着目し、英国の大学がREFのインパクト評価に対していかなる組織的な戦略や支援体制を持ち、それに対応しているのか、取組の実態を明らかにする。上述のとおり、機関レベルでの支援体制に関しては、先行研究において十分な着目がなされていない。本稿は、そのような機関レベルでの支援体制のあり方を明らかにする上での第一歩として、英国大学一般に共通した知見の獲得を目指すよりも、個別大学の特性を踏まえた取組の実態を詳細に描き出すことを目指す。

本稿では、インパクト評価に関する各大学の組織的な取組を戦略、組織・体制、研究者支援・評価、情報発信の4つの観点から分析する。この枠組は、Keith et al. (2018) が指摘する研究インパクトが機関の研究文化と活動に組み込まれるために必要な3要素、すなわち、インパクトを組み込んだ戦略的計画、インパクト関連の役職に特化した上級職の任命、構成員に対するインパクト教育と訓練と、藤井 (2016) が示すインターネットを通じた国内外への研究成果の発信の重要性を踏まえたものである。

分析では、REF2021の評価資料として各大学が提出した機関別研究環境報告書 (Institutional-level Environmental Statement、以下「研究環境報告書」) と実施規則 (Code of Practice) を主な資料とし、これらの資料から十分な情報を確認できない部分は、各大学のウェブサイトや報告書等各機関が発行した資料により補完した。研究環境報告書は、REFの評価項目である環境の査定に用いられる文書の一つで、各大学の研究活動の戦略、制度、資金・施設、人材育成に関する総合的な情報を含む。実施規則は、REFの評価を受ける上で、各大学がどのように取り組むのかを示す資料で、組織体制や、スケジュール、評価対象となる研究従事者の範囲などを定めている。これらの資料は各大学が記載すべき内容が定められており、大学間の比較検討が可能である。本稿で

は、これらの資料からインパクト評価に関する記述を抽出・分析することで、各大学の組織的な取組の実態を明らかにする。

なお、本稿の分析はこのような各大学の公開資料に基づいており、どの程度の内容を記述するかは各大学の裁量に委ねられる。よって、資料に情報がない場合に、該当の取組が存在しないとまでの断定はできない。また、各大学のREF全体への取組と研究インパクト向上に特化した対応が一体となってこれらの資料に記述されているため、REF全体の取組や組織の中にインパクト創出支援も含まれるなど、異なるレベルの取組が混在する場合がある。このような資料の限界を理解した上で、その掲載情報から、各大学がいかなる取組に重点を置いているのかを読み取ることとした。

なお、個々の大学が講じる施策は、各大学の機関特性や大学が有する人的・財政的な資源により異なると考えられる。そのような大学間の差異を踏まえた分析を行うため、分析対象大学については、秦（2013）による英国大学の類型化の試みを基に、複数の事例を、それぞれ研究機能の強さが異なる類型から選び出した<sup>8</sup>。すなわち、研究大学からケンブリッジ大学、准研究大学からグラスゴー大学、教育系大学からケント大学を選定した。いずれも秦の類型化の時点で、人文社会学系分野の学生比率が50%以上の総合大学であり、REF2014からREF2021に向けて各類型の中で評価を向上させた大学である。

表1は、事例3大学の特徴を整理したものだが、近年のデータにおいても、研究者数や提出分野数といった量的指標、REF評価のGPAのような質的指標の双方の面で、上述のタイプの順（ケンブリッジ、グラスゴー、ケント）に研究機能が強いことが見て取れ、類型間での資源の大きさの違いを確認することができる。

表1 事例3大学の概要

機関類型		研究大学	准研究大学	教育系大学
機関名		ケンブリッジ大学	グラスゴー大学	ケント大学
学部学生数 <sup>(1)</sup>		13,645	23,460	14,515
大学院生数 <sup>(1)</sup>		8,960	19,520	3,635
教職員数 <sup>(2)</sup>		Academic: 5,940 Non-Academic: 6,525	Academic: 5,585 Non-Academic: 3,640	Academic: 1,365 Non-Academic: 1,745
THE順位 <sup>(3)</sup>		6位	92位	301-350位
REF 評価	Overall_GPA・ 順位 <sup>(4)</sup>	3.53 (3.33) 3位 (5位)	3.43 (3.10) 13位 (28位)	3.26 (2.95) 38位 (49位)
	Impact_GPA <sup>(5)</sup>	3.54 (3.46)	3.47 (3.28)	3.38 (3.10)
	提出分野数 <sup>(4)</sup>	30 (30)	27 (30)	26 (23)
	提出研究者総数 <sup>(4)</sup> (フルタイム換算: FTE)	2,847 (2,088)	1,378 (1,100)	725 (592)

REF評価: GPA、順位、提出分野数、提出研究者総数はいずれも2021(2014)で数値掲載

(1) <https://www.hesa.ac.uk/data-and-analysis/students/where-study2021-2022>データ

(2) <https://www.hesa.ac.uk/data-and-analysis/staff/working-in-he> 2022-2023データ

(3) <https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2024/world-ranking>

(4) <https://www.timeshighereducation.com/content/ref2021mainonlinetable>

(5) REF2021およびREF2014の各大学の提出分野の評価スコア、提出研究者数より筆者作成



### 3 REFに関する3大学の取組

続いて、上述の戦略、組織・体制、研究者支援、情報発信の4つの観点から分析対象となる3大学の取組を検討し、各大学の取組の実態を明らかにする。本節では特に断りがない場合、戦略、研究者支援・評価、情報発信については研究環境報告書を、組織・体制については実施規則を基に分析を行う。

#### 3.1 戦略

研究インパクトへの戦略的な取り組み方には、表2にも掲げるとおり各大学の持つ背景や使命に基づく差がみられた。

ケンブリッジ大学は、世界トップレベルの大学として、国際的に見ても最高水準の教育・学習・研究の環境を提供することを使命としている。研究インパクトに対する姿勢として長年に亘り社会的インパクトを与えてきたという自負から、REFやインパクト評価自体を特別視しない姿勢が見られる一方で<sup>9</sup>、学外委員による分野別研究評価体制（Strategic Research Reviews）により、外部者の目から、研究インパクトについて評価するなど、着実にREFで評価されるインパクトを取り入れる戦略も同時に行っている点が特徴である。また、歴史的に高度に分権化された部局組織を背景としたボトムアップ型のイニシアティブに対し、大学全体のトップダウン型の戦略を融合させることに重きが置かれている。例えば、学内外で異分野連携が見込まれるものを3年間の時限付きの組織（Strategic Research Initiatives and Networks）として研究奨励を行い、好事例については事業の拡大を目指し、センター組織（Interdisciplinary Research Centres）へ転換する取組が行われている<sup>10</sup>。

グラスゴー大学は、教育・研究に定評があり、英国内でも一流大学として認識される大学群であるラッセルグループの一角を担う。評価期間の2020年に向けた戦略（Inspiring People: Changing the World）と評価期間の先の2025年に向けた戦略（World Changers Together - World Changing Glasgow 2025）に掲げられた標語が示すように、戦略の軸として、世界を変える研究を行うのみならず、そうした研究を可能とする人材を集め、世界トップレベルの学習・研究環境を整備するという人材養成に重きを置いた戦略となっていることが特徴である。人を中心とする研究環境整備の上に、研究の社会的インパクトの重要性を研究コミュニティに根付かせていくことにも精力的に取り組んでいることも特筆すべきである。

ケント大学は、自らの大学の使命として、英国南東部ケント・メドウェイ地域に位置する市民大学として、同地域の文化的・社会経済的なハブとなることを重視している。国際パートナーシップによりグローバルな研究プロジェクトを拡大する一方で、域内大学や地域社会との連携協定等を結び、地域における医療・公衆衛生等の研究分野の発展への寄与や、社会経済的に恵まれない地域の地域振興等への貢献を行っている。このようにケント大学は地域社会における貢献に加えてグローバルな課題に取り組む最先端の研究を志向し、社会・経済・文化的インパクトの創出を核とし、社会変革をもたらす学際的研究を最優先事項としている。

表2 研究環境報告書から見える各大学の研究インパクトに関する戦略

	ケンブリッジ大学	グラスゴー大学	ケント大学
使命	・世界最高水準の知の創出と教育・学習・研究の環境の提供	・世界を変える研究を可能とする人材を集め、トップレベルの学習・研究環境を整備	・市民大学の使命として、地域の文化的・社会経済的なハブとなることを重視
戦略	・社会的インパクトに対する当然視 ・ボトムアップとトップダウンを融合した研究戦略	・人材育成・個々のキャリアを重視する教育研究環境を整備 ・社会的インパクトを根付かせる意識醸成	・地域連携と貢献を核としつつ、グローバルな課題へ取組

出典：各大学の研究環境報告書を参照し、筆者作成。

### 3.2 組織・体制

組織・体制について、大学全体の方針・戦略の策定体制、部局横断的な支援体制、分野・部局別の支援体制に分類した。ここでは、REFに対する大学全体の組織・体制を追いながら、その中でもインパクト評価に対応する体制がどのように組み込まれているかを明らかにする。結論を先取りするならば、表3のとおり、3大学ともREFに関する組織・体制は類似の構造を持っており、階層ごとにREFに参画する研究の質を確保し、向上するための組織・体制が設けられている。その上で、グラスゴー大学とケント大学では、研究インパクト評価に特化した支援機能を組み込むなどインパクト評価の向上に向けた支援体制がより手厚いものとなっている。

大学全体の方針・戦略の策定体制として、全体の責任者を3大学とも研究担当の副学長とした上で、REFへの対応を含む研究全体の戦略を策定する組織（ケンブリッジでは研究政策委員会、ケント大学では研究革新委員会）や、研究全体の戦略にとどまらず、より包括的に大学全体の戦略を策定する組織（グラスゴー大学では大学執行部）<sup>11</sup>があり、さらに、REFに特化した組織として、ケンブリッジ大学ではREFの方針・戦略を承認するREFプロジェクト委員会、グラスゴー大学ではREFの進捗の監督や関連するリスクの検討、最終承認を行うREF2021プロジェクト委員会を設けている。

部局横断的な支援体制としては、いずれの大学においても、大学全体での運営や進捗を管理する組織を設けているが、グラスゴー大学とケント大学の方がインパクトに特化した組織を設けるなど、より手厚い支援体制を整えている。ケンブリッジ大学では、REF運営グループが監督や主要方針の助言を行い、REF事務局が事務的に支援している。グラスゴー大学では、REF運営グループが提出書類の進捗状況の評価・管理、REFに関する資料・データの根拠となる情報管理や品質保証などを行う。また、REF運営グループの下に4つの技術的なサブグループが設けられており、インパクト、スタッフ、アウトプット、環境の4つの観点から提出用データを収集する。ケント大学では、REF運営グループが準備状況の監督やインパクト事例の提出書類について承認するとともに、REF調整グループが提出準備の進捗状況の管理、評価分野（UoA：Unit of Assessment）の戦略の見直し、全学的なベストプラクティスの共有、スタッフの配置の提言などを行う。また、インパクト評価に特化した取組として、研究インパクト戦略グループが、研究インパクト実践を推進する研修やイベントを行っている<sup>12</sup>。

分野・部局別の支援体制としては、3大学において、部局ごとにREF資料の提出にあたって必要な作成・支援を行う組織を設けており、特にグラスゴー大学とケント大学では、支援者や外部評



価者など、より多角的な視点を取り入れることでREFでの評価を高めようとする取組を講じている。ケンブリッジ大学では、各スクール（The Schools）に設けられている評価分野委員会が、提出書類の作成や研究成果の選択等を行うとともに、研究の目的や可能性、関係者、マイルストーンなどを記載した様式（Impact Template）の作成、REF提出資料に含まれるインパクト事例の作成と選定を行う。グラスゴー大学では、各カレッジの評価委員会がREF提出資料について監督・調整を行っており、資料の質について責任を持つとともに、提出までの評価分野アクションプランの準備や実施、監視等を行う。また、このカレッジ評価委員会を支援するためのREF評価分野支援者（REF UoA Champions）や、優れた質のインパクト事例を特定し、提出までサポートするREFインパクト支援者（REF Impact Champions）を配置している。ケント大学では、評価分野作業グループが、評価分野ごとの戦略を立てて提出書類の作成に協力するとともに、どのような研究者、成果物、インパクト事例を提出書類とするかをREF運営グループに提案する。また、通常、英国の他の高等教育機関に所属する外部評価者を任命し、アウトプットの質に関するコメントを求めることとしている。

表3 実施規則から見える各大学の研究インパクトに関する組織・体制

	ケンブリッジ大学	グラスゴー大学	ケント大学
全学	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究政策委員会（研究戦略全般）</li> <li>REFプロジェクト委員会（REF特化）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学執行部（大学全体戦略）</li> <li>REF2021プロジェクト委員会（REF特化）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究革新委員会（研究戦略全般）</li> </ul>
部局横断	<ul style="list-style-type: none"> <li>REF運営グループ（監督・助言）</li> <li>REF事務局（事務的支援）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>REF運営グループ（評価・管理）</li> <li>インパクトサブグループ（データ収集）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>REF運営グループ（監督・承認）</li> <li>REF調整グループ（進捗状況管理）</li> <li>研究インパクト戦略グループ（研修・イベント）</li> </ul>
分野・部局別	<ul style="list-style-type: none"> <li>各スクールの評価分野委員会（提出書類作成・選定・インパクトテンプレート作成）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各カレッジの評価委員会（監督・調整）</li> <li>REF評価分野支援者（上記のサポート）</li> <li>REFインパクト支援者（事例特定・支援）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価分野作業グループ（戦略・作成支援・事例選定）</li> <li>外部評価者</li> </ul>

出典：各大学の実施規則およびウェブサイトを参照し、筆者作成。

### 3.3 研究者支援・評価

インパクト創出に関する研究者支援・評価について、教育・研修プログラム、表彰制度、人材戦略の3つのカテゴリーに分類した。3大学に共通して、インパクト創出につながるような教育・研修プログラムに関する取組がある。

一方、各大学において研究環境報告書で重視して記述している項目には、表4に見られるような差異があり、ケンブリッジ大学では、インパクト創出へのインセンティブや研究者のインパクト創出意欲を自発的に促そうとする方向性が見られる。グラスゴー大学では全ての項目について言及され、インパクト創出への全学的な支援の仕組みが充実し、インパクトを重視する研究文化の醸成に重点を置いている。ケント大学においては、インパクト創出への包括的な支援や緩やかな期待が示されている。

表4 研究環境報告書から見える各大学の研究インパクトに関する研究者支援・評価

	ケンブリッジ大学	グラスゴー大学	ケント大学
教育・研修プログラム	・実践的研修等	・インパクト支援スタッフの配置・様々な研修等	
表彰制度	・インパクトとエンゲージメント賞	・リサーチカルチャー賞	－
人材戦略	－	・業績・昇格基準の改訂	・アカデミックキャリアマップ

出典：各大学の研究環境報告書を参照し、筆者作成。

教育・研修プログラムとしては、3大学ともにインパクトに関連する様々な研修等が提供され、グラスゴー大学とケント大学ではインパクト支援スタッフが配置されていることが強調されている。ケンブリッジ大学では、インパクトの商業化支援として研究者への意識啓発と実践的な研修機会を提供し、さらに、インパクトを重視し、協働的かつ協議的な公共関与を設計できるよう、広範なパブリックエンゲージメントプログラムを展開している。グラスゴー大学は専任のインパクト支援スタッフ6名を中央および各カレッジに配置し、インパクト計画および研究に基づくパブリック・エンゲージメントを支援するためのリソースと研修が拡充されている。また、外部とのエンゲージメント活動とインパクトを記録するためのオンラインリポジトリも開発している。さらに、インパクトに関する様々な研修やプログラムが提供されていることがウェブサイト上からも確認でき、パブリック・エンゲージメントに関するトレーニング<sup>13</sup>のほか、計画やナレッジ・エクスチェンジ (Knowledge exchange activities)、研究資金申請のレビューといった様々な点について研究者個人や研究プロジェクトに合わせた支援を実施している<sup>14</sup>。ケント大学では、全学レベルの「インパクト戦略グループ」を設立し、大学全体でベストプラクティスを共有しているほか、中央のリサーチ・イノベーション・サービスチームに2名の常勤のリサーチインパクトオフィサーを配置している。その上で、インパクトの最大化等について学ぶ会議 (Maximise Your Research Impact) の年次開催<sup>15</sup>、全学的な若手研究者ネットワークを通じたオーダーメイドのインパクトトレーニング、インパクト達成に関する定期的な会合、インパクトチームによる一対一のトレーニングと支援が提供されている。インパクトに関するデータを記録・保存するソフトウェアにも投資し、全研究者向けのトレーニングを実施している。さらに、3大学ともに大学内外との繋がりを持たせることを目的とし、インパクト創出、研究文化の醸成やパブリック・エンゲージメントを促進するためのネットワーキングも見られる。

表彰制度は、インパクトの創出や研究文化への貢献を学内で認識できる取組である。ケンブリッジ大学における「インパクトとエンゲージメント賞」は、学術界を超えて、経済社会文化、公共政策やサービス、健康、環境や生活の質に与える影響や利益を生み出す研究を奨励し、その功績を称え<sup>16</sup>、研究へのインセンティブを与えていると推察できる。グラスゴー大学の「リサーチカルチャー賞」は、卓越した協働の実践を紹介し、研究文化において先導的かつ独創的なインパクトを与えている者を表彰している<sup>17</sup>。

人材戦略としては、インパクトを昇進基準に盛り込むことや、インパクト創出への期待を明確に示す事例がみられた。グラスゴー大学では、2019年には昇進基準を改訂し、研究成果に対する評価と同等の評価をインパクトに与えることとなった。インパクトにつながる可能性のある活動ではな

く、インパクトそのものの達成に焦点を当てることや、可能な限り早期に、かつ透明性をもって広範なコミュニティと研究を共有することが評価される<sup>18</sup>。ケント大学では、2019年にキャリア開発を支援するため、新しい「アカデミックキャリアマップ」を策定している。これは、若手研究者から教授に至るまで、研究者のキャリア段階毎に大学としての期待を詳細に示した枠組である。このマップは、活動、基準、行動の例を示しており、外部との関与、インパクト、研究インテグリティに重点を置きながら、研究者が質の高い研究を行うよう奨励するものである。

### 3.4 情報発信

情報発信について、インターネット・SNS等の各種メディアを用いた情報発信と、地域社会（市民や政府・産業界）との交流による情報発信に分類した。表5のように3大学の情報発信の手法や中身には多くの共通点がある一方で、活動の広がりや方向性には差異が見られる。なお、オープンアクセス等はインパクトを直接的に創出する取組ではないが、インパクトを浸透させる役割を担う点で重要なため、3大学いずれにおいてもオープンアクセスの取組を行っていることを述べておく。ケンブリッジ大学は、英国大学で最初にオープンリサーチの環境整備に着手するなど社会に対するインパクト発信の先駆者的な役割を担うと同時に、交流規模も大きく、その対象は世界中に広がっている。グラスゴー大学は、研究者の育成支援に注力し、世界レベルを意識した交流と情報発信が行われている。ケント大学は、地元地域に貢献するインパクトを重視し、近隣住民に重きを置いた交流と情報発信が行われている。

表5 研究環境報告書から見える各大学の研究インパクトに関する情報発信

		ケンブリッジ大学	グラスゴー大学	ケント大学
社会との交流	市民との交流	・科学フェスティバルの開催・参加 ・大規模な施設の公開・展示		・公共テレビ放送局を開設 ・科学フェスティバルへの参加 ・施設の公開・展示 ・地元住民と協議しながらキャンパスを開発
	政府・産業界	・研究者個人レベルでの知識提供 ・組織レベルでの連携、ハブ機能を持つセンターの設置		—

出典：各大学の研究環境報告書およびウェブサイトを参照し、筆者作成。

インターネット・SNS等の各種メディアを用いた情報発信については、3大学ともウェブサイト、YouTube、X、Facebook、Instagram等のツールを活用し、インパクトを包含した大学戦略や研究戦略を発信している。特にグラスゴー大学では、研究文化や研究インテグリティに関する年次声明を発表し、研究成果のみならず大学のインパクトに対する方針や取組に関する情報発信も行っている。またケント大学では、地域メディアを活用したアウトリーチ戦略としてキャンパス内に公共テレビ放送局を開設し、教育番組だけでなく研究ドキュメンタリーの配信も行っている点が他にない特徴である。

社会との交流では、市民と政府・産業界との交流があり、いずれの大学も交流を通じて研究成果や専門知を関係者に公開、あるいは提供する形で社会に研究成果が発信されている。

市民との交流については、研究公開イベントの参加や主催、大学施設開放を通じた交流が見受けられる。例えば、3大学とも国内外の大規模な科学フェスティバルに参加している。また、ケンブリッジ大学とグラスゴー大学では、大規模な科学フェスティバルを主催し、市民と研究者との交流が行われている。また、3大学ともに博物館や研究センター等の学内研究施設の一般公開も行い、一般の人々が研究成果に触れる機会を創出している。

政府・産業界との交流については、研究者個人レベルと組織レベルの交流がある。研究者個人の交流では、政府機関や公共セクターに委員や専門家として参画し、政策立案に関与する形が3大学ともに見受けられる。政府・産業界との組織間の交流では、ケンブリッジ大学では、科学政策センター等を通じた政府機関との緊密な連携やマックスウェル・センター等大学のセンターと多数の企業が連携し、共同研究を促進する環境を提供している。グラスゴー大学では、大学所有の会社において300以上のグローバル企業と100以上の学術機関の顧客と協力し、大学のセンター（James Watt Nanofabrication Centre）に商業的アクセスを提供している。このように政府や産業界とのパートナーシップを組織レベルで構築し、社会のハブ機能として共同研究を行うセンターや施設等を整備している。ケント大学では、インパクトの実現に重きを置くメインキャンパスの施設整備において、地元関係者と協議しながら地域に密着したキャンパス開発を行っている。

#### 4 おわりに

本稿では、英国の個別大学の事例に着目し、各大学がREFの研究インパクト評価に対していかなる戦略や組織体制を持ち、それに対応しているのかを明らかにしてきた。

各大学の取組を整理すると、ケンブリッジ大学は全方位に学際的なインパクトの創出を志向する研究大学、グラスゴー大学はインパクト文化、個人キャリア・研究環境を重視する大学、ケント大学は注力分野を設置し、世界を牽引する市民教育大学としての研究戦略を有する大学と整理できよう。これらの取組は、各大学の置かれた文脈において、研究成果の社会的インパクトを最大化し、広範囲にわたる学内外のステークホルダーとの関係構築に貢献している。

また、機関類型ごとの特性は、各大学のREFの研究インパクト評価に対する戦略に違いとして表れている。戦略の観点では、研究大学であるケンブリッジ大学では、研究が社会にインパクトを与えるものであることは当然視される一方、研究機能が相対的に弱いグラスゴー大学では、人材養成や社会的インパクトの重要性を根付かせることに注力するとともに、ケント大学では、地域連携・貢献が重視されている。

そして、戦略の差異は、組織・体制や研究者支援・評価のあり方の違いにつながっているものと考えられる。分析資料では、グラスゴー大学とケント大学は研究インパクトを自大学に根付かせるための教育・研修等の充実を重要課題とし、研究インパクトを当然視するケンブリッジ大学よりも手厚い支援体制が記述されている。加えて、グラスゴー大学では、研究インパクトを昇進基準と結びつけるなど、研究インパクトをより積極的に推進するための仕組みについても強調されていた。

また、情報発信では、より大きな資源を有するケンブリッジ大学で最も大規模な取組が見られる一方で、グラスゴー大学では世界水準を意識した地域社会との交流・情報発信が、ケント大学では

地域社会に重きを置いた交流・情報発信がそれぞれ行われている。

これらの差異は、個々の大学が有する特性、使命、資源を踏まえ、自大学にとって必要な組織的な取組を選択した結果だと考えられる。日本では研究インパクトを高めるための取組に関する知見が十分に蓄積・共有されておらず、各大学における取組は手探りの段階にある一方、本稿の事例とした3大学では、各大学が自大学の使命や資源を踏まえ、個々の特性に応じた組織的な施策に取り組み、それをREFの研究インパクト評価の向上に繋げようとしている。今後、日本の大学において、研究インパクト評価を適切に受容し、実質化していくためには、大学が自大学の現況を適切に認識し、英国大学の事例も参照しつつ、研究インパクトを高めるための知見を蓄積・共有しながら、各大学の特性や使命、資源に応じた組織的な取組を行うことが必要だと考えられる。

ただし、以上のような本稿の知見にはいくつか課題がある。例えば、今回事例として取り上げたのは3大学のみであり英国の大学全体の多様な実態を代表するものとは言い難い。また、本稿の分析範囲では、各大学の歴史、ガバナンス、財政状況など、研究戦略・支援策に影響を与えると考えられる個別の要因については検討対象としていない他、分析対象とする資料にも一定の制約があった。今後は、これらの要因も含め、より多様な事例の検討を通じて、英国における研究インパクト評価への組織的対応の全体像を明らかにしていく必要があるだろう。

注 ※Webサイト最終閲覧日はすべて2024年11月1日

- 1 本稿では、便宜的に、研究インパクト評価を「研究活動が学術界を超えて社会・経済・文化・環境等に与える影響の評価」、社会的インパクト評価を「大学等機関の活動全般が社会にもたらす変化の評価」とするが、これらは概念的に重複する部分があり、文脈に即してインパクト評価、研究インパクト評価、社会的インパクト評価等の用語を柔軟に使用する。
- 2 Jump, P., 2013 “Evolution of the REF,” *Times Higher Education*, 10.17.  
(<https://www.timeshighereducation.com/features/evolution-of-the-ref/2008100.article>)
- 3 REF2029 “What is the REF?” (<https://www.ref.ac.uk/about/what-is-the-ref/>)
- 4 REF2021, 2022, “Guide to the REF results,” 5.12.  
(<https://2021.ref.ac.uk/guidance-on-results/guidance-on-ref-2021-results/index.html>)  
なお、学術界への知的影響は研究成果の質の評価に含まれる。
- 5 Ibid.
- 6 Ibid.
- 7 文部科学省第4期中期目標期間における国立大学法人運営費交付金の在り方に関する検討会、2021、「第4期中期目標期間における国立大学法人運営費交付金の在り方について（審議まとめ）」6.18.  
([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/108/toushin/mext\\_00003.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/108/toushin/mext_00003.html))
- 8 参照した秦(2013)による分類は、HEFCE及び研究審議会(RC)や研究契約からの補助金比率、研究評価(RAE)、博士課程学生の比率、学生の質等に基づくものである。なお、RAEの評価



については、RQ2.5以上が研究大学、RQ1.5-2.4が准研究大学とされており、准研究大学は更に、A/Bに区分されているが、本稿では一つの類型として扱う。また、教育系大学については、RAE評価の基準は明示されないが、研究よりも教育に重点を置く大学として分類されている。

- 9 University of Cambridge “Research Strategy Office,” (<https://www.research-strategy.admin.cam.ac.uk/impact>)
- 10 University of Cambridge “Strategic Research Initiatives & Networks,” (<https://www.cam.ac.uk/research/research-at-cambridge/strategic-research-initiatives-networks>)
- 11 University of Glasgow “Senior Management Group,” (<https://www.gla.ac.uk/myglasgow/governance/corporategovernance/leadershipgovernance/seniormanagementgroup/>)
- 12 Young, L., 2023, “Research Impact Strategy Group (RISG), The Democratisation of Research Impact Strategy, Wednesday 29 March,” 2.21. (<https://blogs.kent.ac.uk/ris/2023/02/21/research-impact-and-strategy-group-risg-conference-the-democratisation-of-research-impact-strategy-wednesday-29-march/>)
- 13 University of Glasgow “Training and Resources,” (<https://www.gla.ac.uk/myglasgow/publicengagement/trainingandresources/>)
- 14 University of Glasgow “Training and Support,” (<https://www.gla.ac.uk/myglasgow/ris/researchimpact/trainingandsupport/>)
- 15 University of Kent “Maximise Your Impact: Effective Seminar Participation Strategies,” (<https://www.kent.ac.uk/whats-on/event/70212/maximise-your-impact-effective-seminar-participation-strategies>)
- 16 University of Cambridge “Vice-Chancellor’s Awards,” (<https://www.research-strategy.admin.cam.ac.uk/impact/vice-chancellors-awards>)
- 17 University of Glasgow “Research & Innovation Services,” (<https://www.gla.ac.uk/myglasgow/ris/researchculture/leadingresearchculturechange>)
- 18 University of Glasgow “Academic Promotion Criteria for 2019-20,” ([https://www.gla.ac.uk/myglasgow/news/newsarchive/2019/8\\_july2019/headline\\_655189\\_en.html](https://www.gla.ac.uk/myglasgow/news/newsarchive/2019/8_july2019/headline_655189_en.html))

## 参考文献

### 【資料】

University of Cambridge “Code of Practice” ([https://2021.ref.ac.uk/media/1561/university-of-cambridge\\_ref2021-code-of-practice.pdf](https://2021.ref.ac.uk/media/1561/university-of-cambridge_ref2021-code-of-practice.pdf))

University of Cambridge “Institutional-level Environmental Statement” (<https://results2021.ref.ac.uk/environment/statements/institution/10007788>)



University of Glasgow “Code of Practice” ([https://2021.ref.ac.uk/media/1510/university-of-glasgow\\_ref2021-code-of-practice.pdf](https://2021.ref.ac.uk/media/1510/university-of-glasgow_ref2021-code-of-practice.pdf))

University of Glasgow “Institutional-level Environmental Statement” (<https://results2021.ref.ac.uk/environment/statements/institution/10007794>)

University of Kent “Code of Practice” ([https://2021.ref.ac.uk/media/1513/university-of-kent\\_ref2021-code-of-practice.pdf](https://2021.ref.ac.uk/media/1513/university-of-kent_ref2021-code-of-practice.pdf))

University of Kent “Institutional-level Environmental Statement” (<https://results2021.ref.ac.uk/environment/statements/institution/10007150>)

### 【引用文献】

藤井翔太, 2016, 「比較可能なデータシステム構築のために——欧州における新たなランキング・研究評価の動向」石川真由美編『世界大学ランキングと知の序列化—大学評価と国際競争を問う』京都大学学術出版会, 299-323.

秦由美子, 2013, 「イギリスにおける新たな大学分類」『大学論集』44: 19-34.

秦由美子, 2018, 「研究評価」児玉善仁ほか編『大学事典』平凡社.

林隆之, 2017, 「研究評価の拡大と評価指標の多様化」『情報の科学と技術』67(4): 158-63.

林隆之, 2020, 「大学評価の20年」『高等教育研究』23: 9-31.

林隆之, 2022, 「大学改革と科学技術・イノベーション政策」『IDE』640: 60-6.

Hemlin, S. and Rasmussen, S. B., 2006, “The shift in academic quality control,” *Science, Technology, & Human Values*, 31(2): 173-98.

Keith, N., Yu, X., and Barbeau, R., 2018, “Diversity of institutional support for research impact implementation,” *Zeitschrift Für Diversitätsforschung Und Management*, 3(2): 199-207.

Khazragui, H. and Hudson, J., 2015, “Measuring the benefits of university research: Impact and the REF in the UK.” *Research Evaluation*, 24(1): 51-62.

King’s College London and Digital Science, 2015, *The nature, scale and beneficiaries of research impact: An initial analysis of Research Excellence Framework (REF) 2014 impact case studies*, Bristol, United Kingdom: HEFCE.

小林直人・丸山浩平・島岡未来子, 2015, 「英国の新たな大学研究評価REFにおけるインパクトの分析」『年次学術大会講演要旨集』30: 154-9.

小林直人・全孝梨・滝沢航平・安原幸司, 2022a, 「英国の研究評価REF2021の分析（Ⅰ）：事例研究」『年次学術大会講演要旨集』37: 241-4.

小林直人・滝沢航平・全孝梨・安原幸司, 2022b, 「英国の研究評価REF2021の分析（Ⅱ）：事例研究」『年次学術大会講演要旨集』37: 245-8.

Murphy, T., 2017, “Revising the research excellence framework: Ensuring quality in REF2021, or new challenges ahead?,” *Perspectives: Policy and Practice in Higher Education*, 21(1): 34-9.

- Samuel, G. N., and Derrick, G. E., 2015, "Societal impact evaluation: Exploring evaluator perceptions of the characterization of impact under the REF2014," *Research Evaluation*, 24(3): 229-241.
- Smith, K. E., Bandola-Gill, J., Meer, N., Stewart, E. and Watermeyer, R., 2020, *The Impact Agenda: Controversies, Consequences and Challenges* Bristol University Press.
- Stern, N., 2016, *Building on success and learning from experience: An independent review of the Research Excellence Framework*, Department for Business, Energy & Industrial Strategy, London, UK.
- スウィーニー, デヴィッド・池田潤, 2019, "Supporting the best research in UK" 『人文社会系分野における研究評価：シーズからニーズへ：研究大学強化促進事業シンポジウム報告書』 45-51.
- Watermeyer, R., 2016, "Impact in the REF: Issues and obstacles," *Studies in Higher Education*, 41 (2): 199-214.
- Watermeyer, R. and Tomlinson, M., 2022, "Competitive Accountability and the Dispossession of Academic Identity," *Educational Philosophy and Theory*, 54 (1): 92-103.

# Organizational Approaches to Impact Assessment in the Research Excellence Framework in UK Universities

Students of “Seminar on Higher Education Policy and Management” AY2024

## Abstract

Through case studies of three UK universities with different research orientations, this study examines organizational approaches to impact assessment in the Research Excellence Framework (REF). Since the 1990s, research quality has emphasized the social, economic, and cultural impacts through organizational management alongside scientific validity. The UK introduced impact assessment in the 2014 REF, ultimately increasing its weighting from 20% to 25% in 2021. Meanwhile, in Japan, knowledge and experience regarding research impact assessment remain insufficient, and universities are still exploring effective implementation methods.

This study analyzes institutional-level environmental statements and codes of practice from three UK universities, the University of Cambridge (research university), University of Glasgow (quasi-research university), and University of Kent (teaching-oriented university) - focusing on four aspects: strategy, organizational structure, the system for supporting and evaluating researchers, and information dissemination.

Each university adopts a distinct approach, with the University of Cambridge pursuing comprehensive impact creation based on existing research excellence; the University of Glasgow emphasizing the cultivation of the impact culture and enhancement of individual career development and the research environment; and the University of Kent focusing on regional contributions while pursuing global research excellence in selected fields. These findings underscore the development of organizational approaches to impact assessment that reflect institutional characteristics and resource capabilities.

